優れた芸術作品は
その時代を生きる人々の気持ちを
象徴しています。 ―― 花里麻理

自分を壊すくらいの覚悟がなければ、
その先の地平には到達できない。
―― 西中千人

Special 対談

西中千人 × 花里麻理

（ガラス造形作家）　（菊池寛実記念智美術館 学芸部長）

「ガラスは割れる、人は死ぬ。だから、今を精一杯生きる。」

目に見えるヒビ割れの奥にある、生命の煌めきを表現した「ガラスの呼継」。継ぐという陶芸の修復技法を作品に取り入れた西中千人氏が、陶芸界を見続けてきた花里麻理氏（菊池寛実記念智美術館学芸部長）と、作品と時代、今後について語り合った。

日本探しは自分探し

花里　西中さんは呼継という手法でヒビの美しさを独自に表現されているわけですが、そもそもどうして呼継を始められたのでしょうか。

西中　二十六歳のときにアメリカの大学に留学し、ガラスと彫刻を勉強したのですが、アメリカ人の女の子に『源氏物語』について聞かれたことがあったんです。彼女は日本人なら『源氏物語』くらいは知っているだろうと思ったんでしょうね。でも、二十六歳のチャラい男は源氏物語を読んだことがなかった（笑）。「ごめんなさい」と答えるしかなく、日本で生まれ育った自分が日本のことを何もわかっていないという現実にショックを受けました。花里さんも海外でそんな経験をされたことはありませんか。

花里　自分はそういう場面には遭遇していないですね。

西中　自慢するわけではありませんが、その頃、ベネチアンガラスの腕はかなりのレベルにありました。でも、このままガラス作家としてデビューしたらどうなるのか。たとえば、ニューヨークへ行ってもニセモノ

とは言われないまでも、モノマネになるんじゃないか、そんな不安が芽生えたわけです。それからですね、日本のことを勉強し、茶陶にも興味を持つようになったのは。

花里　「日本探し」は「自分探し」でもあったわけですね。

西中　アイデンティティってやつを問われたわけです（笑）。日本にいるとそんなこと意識しないじゃないですか。

花里　言葉を尽くして説明しなくても自分のことを理解してくれる人に囲まれているから、アイデンティティを意識したり、自己を確立する必要はないですよね。でも西中さんは日本人としてのアイデンティティに目覚めた段階で、ガラスをやめて、たとえば陶器に進む道もあったはずです。それをしなかったのは日本探しの過程で何かを見つけたわけですか。

西中　そうです。それがヒビなんです。ある美術館で、外国人の方が何人かで金継のお茶碗を前に話していました。どうやら、その地味な茶碗がなぜ高い評価を得ているかが分からないようなんです。そのうちに一人が「ほら、あそこに金がわずかに残っている。元は全部金だったんだよ。だからお宝なんだ」と言い出しました。「そうか、そう来るか」と、驚きましたね（笑）。日本人のように割れた部分に金が施されることで、それが一つの景色になるという解釈を外国の人たちはしないわけです。ああ、こんなところに日本独自の美があるんだと、強烈な印象を受けました。

花里　割れたり、壊れたりした陶器を漆で継いで金や蒔絵を施す金継や呼継には、持ち主の好みが如実に出ます。それはヒビを美しく見せる技法ではあるけれど、同時に持ち主が作り手の世界に介入していく面白さでもありますね。

呼継香炉「檜皮 ひわだ」　高さ14×幅12×奥行12cm

本質はヒビにある

西中　お茶の世界ではお茶碗が使われて汚れていくのを「育てる」と言いますよね。そんなところにも呼継に共通する日本的な美意識を感じ、そうした価値観がずっと引っかかっていました。「継ぐ」作品を発表し始めて六年になりますが、人前に出せるようになるまでの実験期間も長かったんです。最初は「継ぐ」ということに意識が行っていましたが、ここ二、三年は「継ぐ」ことより、ヒビそのものに自分が求める表現の本質はあるんじゃないかと考えています。

花里　そのような西中さんの表現のあり方を知る上でも、ぜひ呼継の制作工程を知りたいですね。簡単なご説明をお願いできますか。

西中　たとえば藍と朱の二色から成る呼継を作る場合、まずそれぞれの色の器を作り、ハンマーや鉄の棒で割ります。あるいはガラスどうしをぶつけます。

花里　なかなか破壊的ですね。

西中　せっかく作ったものを壊すわけですから、本当はすごく嫌なんです。で、割った破片がうまく組み合わさるように、形が合うものを集めていきます。でも、うまく合う破片がないと、また一個割ります。こうして、うまくいけば二、三個割るだけで済みますが、たいていはもっと割りますね。次は、破片と破片を積み重ねて、五百度くらいの低い温度で焼きます。こうすると破片どうしが熱でくっつくんです。構造的には弱いんですが、一つの形にはなります。

花里　その段階では破片どうしの間には隙間があるのですか。

西中　そうです。それを溶けた、透明なガラスで巻き取って、また吹いて形に仕上げていきます。簡単に言うと、そんなところでしょうか。最初の頃はヒビの部分が小さく狭かったんですが、だんだん広がってきましたね。

花里　構造的にはさらに甘くなるから、くっつけるのはたいへんですね。

西中　そのへんは勢いというか気合ですね（笑）。自分としては「継ぐ」ことより、とにかくヒビを見せたい。何とかして隙間を大きくしたり、分厚いガラスにしてヒビを深くしたいんです。

花里　確かに色を並べるとき、光を通す透明なものが入ることによって色の強さが出ますよね。

西中　単色であっても、そこにヒビがあることでコントラストが効くというか、私が目指す「不完全の美」が凝縮されるんです。

衝突の美学

花里　西中さんのお話をお伺いして、当初は破片を継ぐことにあった意識が、だ

んだん破片と破片の間のヒビに移行していったという理由がよくわかりました。

西中　最近は、日本でこうしたヒビに景色を見出した人たちは何を考えていたのかを考えるようになりました。陶器のヒビの美しさは戦国時代の茶人によって見出されたわけですが、この時代にお茶をやっていたのは主に武士です。そして、彼らは常に死と隣り合わせでした。だから、桜が散るのを見て、生きる姿の美しさを想ったのでしょう。それは、割れた茶碗やそれを継いだ姿に美しさを感じたのと同じではないかと、つい妄想してしまいます。私には命の果てを金で継いだようにも見えるのです。しかも、そのような美意識が四百年以上経った今も日本には残っています。

呼継「天地 あまつち」　高さ23.0×幅23.5×奥行18.5cm

花里　私は古陶磁を専門としていないので、西中さんのお考えが正しいかどうかを今申し上げることはできません。それより、西中さんにはもっと先へ行ってほしいですね。呼継というのはもともとあったものを生かし、バラバラになったものを一つにまとめ上げていくイメージですが、お話を聞く限り、西中さんの作品は異なったものを衝突させるところに美しさを見い出して出来上がっている面も重要なように思われます。それだけに西中さんが今一度自分の世界を壊し、新しい世界をつくられていくのではないかという期待があります。

西中　私自身、一度軸足を置いたからと言って、同じ場所にしがみついていたくはありません。そもそも呼継も自分が作ったものをあえて壊したいという気持ちがどこかにあったから始めたんだと思います。作ったものを割って、また形にしていくというのは並大抵でない時間と技術とエネルギーを要します。でも、自分がよしとするもの、もっと言えば自分自身を壊すくらいの覚悟がなければ、その先の地平には到達できません。自分が目指しているのは「ガラスという素材と深く語り合い、自らの想いを憑依させる」ことであり、その表現方法はこれからもどんどん変化していくと思います。

花里　衝突のエネルギーがあふれているようなお仕事をぜひ拝見したいですね。私のような学芸員はつい難しい言葉で説明しがちですが、そんなことをしなくても、人の目というのは正確だし、脳は素直に反応します。見ただけで元気が出るとか、ちょっと後ずさりしてしまうくらい衝撃的であるとか、体が否応なく反応してしまいます。それが美術のあるべき姿だろうし、西中さんの作品の魅力もそこにあるように思われます。

西中　実は今おっしゃられた衝突のエネルギーというのは、ずっと考え続けていることでもあるんですよ。来年なのか、それとも明日なのかわかりませんが、自分の中にそういう方向を目指しそうな予感はあります。たとえば、呼継ではなく、ヒビだけを見せるような……。つまり、割ったままを見せる表現もあるだろうと思っています。

花里　優れた芸術作品やアーティストは美術というジャンルの中の存在だけではなく、その時代を生きる人々の気持ちを反映したり、象徴していたりするんですね。言ってしまえば、美術なんかなくても人間は生きていけるし、世界は存在します。にもかかわらず、一つの作品が時代を超えて残り続け、その作品から時代を読み解くことさえできるのは、作った人や関わった人の息吹がそこに詰まっているからです。

西中　私も今という時代を生きる一人の表現者として、常に時代の空気を感じながら悪戦苦闘していきたいですね。私はガラスと自分との関係をこう考えます。「ガラスは割れる。人は死ぬ。だから今を精一杯生きる」。ぜひ今後の創作活動に期待してください。

にしなか　ゆきと
1964年和歌山市生まれ。88年星薬科大学薬学部卒業。91〜94年カリフォルニア芸術大学にて彫刻とガラスを学ぶ。自ら作った器を叩き壊し再び溶かして継ぐ「ガラスの呼継」や日本庭園にガラスアートを取り入れた「玻璃庭園」など、日本の伝統を礎にした新しい表現に挑む。「第1回現代ガラスの美展ーN薩摩」大賞、WIRED主催「CREATIVE HACK AWARD 2013」グラフィック賞受賞。

はなざと　まり
1995〜2001年　三重県立美術館学芸員
2001〜2002年　ニューヨーク滞在
2003年〜　菊池寛実記念智美術館学芸員

2017年個展

- 3/22(水)—28(火)
  米子髙島屋　美術サロン
- 4/26(水)—5/2(火)
  岐阜髙島屋　美術画廊
- 5/31(水)—6/6(火)
  岡山髙島屋　美術画廊
- 6/21(水)—27(火)
  日本橋髙島屋　美術画廊
- 7/12(水)—18(火)
  長崎浜屋百貨店　ギャラリー

構成：米谷紳之介